研究課題　聖衆来迎寺史料の調査・研究

研究経費　三〇万九四五四円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　高橋大樹（大津市歴史博物館）

　所内共同研究者　林晃弘・末柄豊・村井祐樹

　所外共同研究者　和田光生（大津市教育委員会）・井上優（滋賀県教育委員会・琵琶湖文化館）

研究の概要

（１）課題の概要

　滋賀県大津市比叡辻に所在する聖衆来迎寺は、最澄の建てた地蔵教院を起源とし、源信が念仏道場として再興したという所伝を有する天台宗の古刹である。もとは比叡山横川に伝来した国宝『六道絵』一五幅を所蔵するほか、天正年間に京都に所在した元応寺を併合したこともあずかり、多数の文化財を伝えている。  
東京大学史料編纂所は、早くに明治二一・大正一二・昭和二年の三度にわたる史料採訪を行い、文書・聖教取り混ぜて少なからぬ影写本・謄写本を作成している。その後、『六道絵』については、近年本格的な調査研究がなされたのに対し、文献史料については、一九八四年に琵琶湖文化館が「特別展 聖衆来迎寺」を開催したのを契機に、江戸時代成立の寺史『来迎寺要書』を紹介した程度で、本格的な調査研究はなされていない。『新修大津市史』編纂のための調査でも、対象史料は一部に限られ、写真撮影もほとんどなされなかった。  
今般申請者の勤務先である大津市歴史博物館では、仏像・絵画・古文書を中心に同寺の寺宝展を開催することとなり、付随して所蔵史料についても悉皆調査の御許可を得た。この機会を生かし、文書・聖教の総合調査を行いたい。予備的な調査によって影写・謄写の対象になった中世史料の一部の存在を確認したほか、未調査の近世史料が多数存在していることが判明しており、近世史料も視野に収めた調査研究をすすめたい。

（２）研究の成果

　二〇二一年度は、前年度に十分に実施できなかった聖衆来迎寺所蔵の近世・近代文書の整理を行った（大津市歴史博物館寄託分）。近世文書は、(１)聖衆来迎寺の経営等に関するもの、(２)高島郡阿弥陀寺（真言律宗・西大寺末、聖衆来迎寺が兼帯）に関するものに分けられる。それぞれについて調査により得られた主な知見は以下のとおりである。  
(1)　聖衆来迎寺近世文書。開帳関係の史料が比較的多く残されている。なかでも宝暦九年（一七五九）からの江戸湯島天神における開帳については日記がある（一－〇六四）。これらと関連する寺外の史料により、開帳に関する手続きや霊宝の構成、人びとの信仰のありようなどが具体的に明らかになる。  
　また寛文三年（一六六三）・四年に聖衆来迎寺の僧（林昌坊ヵ）が京都・大坂等に出向いた際の記録があり、概して簡略な記述ではあるが、訪問先の様子や、人的な交流を知ることができる（三－〇七〇）。注目される記述としては、美作国津山藩の森長継の家臣と知人になり、織田信長家臣で下坂本にて討死した同家の祖森可成についての情報を伝え、求めに応じて書付を渡したことを記す。これは『来迎寺要書』の記事とも関連するものである。  
(2)　高島郡阿弥陀寺関係文書。特に分量が多いのが同寺の朱印改の関連史料であり、宝暦一〇年（一七六〇）・天明七年（一七八七）・天保一〇年（一八四〇）・嘉永七年（一八五四）の一件記録が残されている。宗派をまたいだ兼帯寺院の僧による特異な事例であり、寺領の所在する堀川村の相給領主蜂屋氏との関係においても例外的な面がある。近世の本末関係のあり方や朱印地寺院の領主的な性格を考える上で注目される。また、「阿弥陀寺年中行事什物幷鑑院江引渡し定式」（三－四四－一六）は、阿弥陀寺と周辺村落の関わりがわかる好史料である。